台大日本語文研究第 20 期
2010 年 12 月，頁 1-16
2010-10-05 收稿，2010-12-09 通過刊登

《今昔物語集》王朝部裡的鬼故事與中國古代的鬼故事
—以亡靈與生前妻子（丈夫）重逢的故事為主—

陳明姿*

摘要

《今昔物語集》本朝部裡出現了各式各樣不同角色的鬼，當中雖有會加害於人的鬼，但亦有具人情味會幫助人的鬼，還有雖欲加害於人，卻反而被人所制服的鬼，另外也有雖不會加害於人，卻會盜取人的物品或是吟詠詩歌者，還有回到陽間造訪其生前的妻子（丈夫）的鬼，這些鬼故事當中有不少受到中國文學的影響，亡靈回到陽間造訪其生前妻子（丈夫）這類的鬼故事亦是其中之一。這類鬼故事如何受容中國同類的鬼故事，又產生何種變容，是一饒富趣味的問題。小稿作爲探討『今昔物語集』裡的鬼故事與中國文學的關連及異同，特別聚集於該作品本朝部第二十七的第二十五話及第二十六話，除考察其與中國文學同類型的鬼故是有何關連外，亦探討兩者之異同。

關鍵詞：《今昔物語集》、《太平廣記》、鬼、震旦部、王朝部

* 台灣大學日本語文學系教授

Ghost Stories in Ouchoubu of Konjaku Monogatarishu And In Chinese Ancient literature

Chen, Mung-tzu*

Abstract

Various kinds of Ghosts with different characters are depicted vividly in Ouchoubu of Konjaku Monogatarishu. While there are ghosts who do harm to humans, there are also ghosts full of humanity. Also, ghosts who come back to visit their spouses, ghosts who make a failed attempt to injure humans, ghosts who steal or chant in order to make themselves conspicuous are also commonly seen. From these stories, we see the influence inherited from Chinese literature. For example, stories in which the ghosts come back to visit their spouses are one kind of the many. It is very intriguing how these stories assimilate Chinese literature, deal with the influence and take on new faces later. Therefore, in this thesis, I am going to focus on the 25th and 26th story in the 27th volume to see how these Japanese stories are connection with their Chinese counterparts, and further compare and contrast them.

Keywords: *Konzyaku onogatarishuu, Tai-Ping-Guang-Ji*, ghosts, Sintanbu, Honchoubu

* Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

『今昔物語集』の本朝部における怪奇（亡霊）説話と中国古代の怪奇（亡霊）説話
—亡霊が生前の妻（夫）と再会する説話を中心にして—

陳明姿*

要旨

『今昔物語集』の本朝部には様々な鬼・亡霊のキャラクターがみられる。その中には、人に危害を加えるものもあれば、人を助ける人情味のあるものもたびたび登場する。または、人に害を加えようとするが、かえって人にやっつけられるものもある。あるいは、直接人に危害を加えないが、物を盗んだり、歌を吟詠したりして、自分の存在を強調するものもある。または、現世の妻（夫）を訪問する亡霊もある。これらの怪奇説話の中には、中国文学の影響を受けたものも多く見られる。現世の妻（夫）を訪問する亡霊説話群もその中の一つである。これらの亡霊説話はどのように中国文学の亡霊（鬼）説話を受容し、且つどのような変容を加えるのか、興味深い問題である。小論は『今昔物語集』における亡霊と中国文学との関連及び異同の考察の一環として、特に本朝部の巻二十七の第二十五話、第二十六話に焦点をあて、これらの亡霊の説話は中国文学の同じ類型の鬼（亡霊）説話といかなる関連を持つのかを考察し、両者の異同をも探求しようとする試みである。

キーワード:『今昔物語集』、『太平広記』、亡霊、震旦部、本朝部

* 台湾大学日本語文学科教授

『今昔物語集』の本朝部における怪奇（亡霊）説話と中国古代の怪奇（亡霊）説話
—亡霊が生前の妻（夫）と再会する説話を中心にして—

陳明姿

一、序

『今昔物語集』の本朝部には様々な鬼・亡霊のキャラクターがみられる。その中には、人に危害を加えるものもあれば、人を助ける人情味のあるものもたびたび登場する。または、人に害を加えようとするが、かえって人にやっつけられるものもある。あるいは、直接人に危害を加えないが、物を盗んだり、歌を吟詠したりして、自分の存在を強調するものもある。または、現世の妻（夫）を訪問する亡霊もある。これらの怪奇説話の中には、中国文学の影響を受けたものも多く見られる。現世の妻（夫）を訪問する亡霊説話群もその中の一つである。これらの亡霊説話はどのように中国文学の亡霊（鬼）説話を受容し、且つどのような変容を加えるのか、興味深い問題である。小論は『今昔物語集』における亡霊と中国文学との関連及び異同の考察の一環として、特に本朝部の巻二十七の第二十五話、第二十六話に焦点をあて、これらの亡霊の説話は中国文学の同じ類型の鬼（亡霊）説話といかなる関連を持つのかを考察し、両者の異同をも探求しようとする試みである。

二、中国の古代における亡霊と生前の妻（夫）と再会する小説

愛し合う人達が一旦死別すれば、思い残すことも多かろう。そのため、亡霊が生前の愛する人、とりわけ配偶者と再会する話も多く言い伝えられている。特に古代中国人は鬼（亡霊）の実在を信じていたので、中国では古くからそういう類型の説話が多く語られている。以下、そういうモチーフをもつ話の中で比較的に詳しく書かれた例を見ていこうと思う。まず、こういう話の中で最も詳しく語ら

れている『録異伝』の「韓重」を見てみよう。

吳王夫差。小女曰玉。年十八。童子韓重。年十九。玉悅之。私交信問。許為之妻。重學于齊魯之間。屬其父母使求婚。王怒不與。玉結氣死。葬閶門外。三年重歸。歸原作詰。據明鈔本改。問其父母。父母曰。王大怒。玉結氣死。已葬矣。重哭泣哀慟。具牲幣往弔。玉從墓側形見。謂重曰。昔爾行之後。令二親從王相求。謂必克從大願。不圖別後。遭命奈何。玉左顧宛頸而歌曰。南山有烏。北山張羅。志欲從君。讒言孔多。悲結生疾。沒命黃壚。命之不造。冤如之何。羽族之長。名為鳳凰。一日失雄。三年感傷。雖有眾鳥。不為匹雙。故見鄙姿。逢君輝光。身遠心近。何嘗暫忘。歌畢。歔欷涕流。不能自勝。要重還冢。重曰。死生異道。懼有尤　。不敢承命。玉曰。死生異路。吾亦知之。然一別永無後期。子將畏我為鬼而禍子乎。欲誠所奉。寧不相信。重感其言。送之還冢。玉與之飲讌。三日三夜。盡夫婦之禮。臨出。取徑寸明珠以送重曰。既毀其名。又絕其願。复何言哉。願郎願郎原作時節。據明抄本改。自愛。若至吾家。致敬大王。重既出。遂詣王自說其事。王大怒曰。吾女既死。而重造訛言。以玷穢亡靈。此不過發冢取物。托以鬼神。趣收重。重脫走。至玉墓所訴玉。玉曰。無憂。今歸白王。玉粧梳忽見。王驚愕悲喜。問曰。爾何緣生。玉跪跪原作詭。據明抄本改。而言曰。昔諸生韓重來求玉。大王不許。今名毀義絕。自致身亡。重從遠還。聞玉已死。故齎牲幣。詣冢弔唁。感其篤終。輒與相見。因以珠遺之。不為發冢。願勿推治。夫人聞之。出而抱之。正如煙然。出錄異傳[1]

『太平広記』ではこの話を『録異伝』より引用したとあるが、『捜神記』巻十六にも同じ話が収められた（但し、『捜神記』の方では女主人公の名前を「玉」とするのではなくて、「紫玉」とする）。『芸文類聚』と『太平御覧』にもこの話が収録されている。両方とも『捜神記』より引用したとある。但し、共に女主人公の名前を「玉」とす

[1] 『太平廣記』巻三百一十六「韓重」（古新書局）1977 年 10 月 P.657。

る。しかし、女主人公の名前に「玉」と「紫玉」という違いこそあれ、内容はまったく同じである。そして、891 年頃藤原佐世によって編集された『日本国見在書目録』には『捜神記』と『芸文類聚』の書名も収載された。即ち、『今昔物語集』（12 世紀前半に成る）が成立する前に、この話がすでに日本に伝わったのである。よって『今昔物語集』の作者もどこかでこの話を読んで、物語を語るに際して、そのモチーフを取り入れたことが考えられる。

この話の中では愛し合った二人は結婚することまで約束したが、親の反対に遭い、余儀なく別れることになった。そのため、女の方が「気結」して死んだ。斉と魯から帰ってきた男の方は恋人が亡くなったことを聞いて「哭泣哀慟」し、供物をもって女の墓へ弔いに行った。亡霊はそれに感応して出現した。二人は墓の中で夫婦の礼を尽くし、願いを叶えてから、男はまた地上に帰った。即ち、男女双方の相手への恋しさが亡霊を愛する人の前に出現させたのである。よって、ここでは二人の相手への思いについてもっと筆を費やしてもよかった筈であるが、文章の中で女の方についてはただ「気結死」とあり、男の方についても「哭泣哀慟」とあるだけで、女の方が何故死に至るのか、読者はただ彼女の詠んだ歌を通してしか推測できないようになっている。また、女を失った男は当然悲しかったはずだが、それについても殆ど描かれていない。心理描写が殆ど欠如しているために、この話も怪異譚的な様相を強く持っている。そして、古代中国では、その話の他に、亡霊が生前の愛する人、特に夫（妻）と再会する話がまた沢山収載されている。

次は『幽明錄』の「胡馥之」を見てみよう。

> 上郡胡馥之。娶婦李氏。十餘年無子而婦卒。哭之慟。汝竟無遺體。怨酷何深。婦忽起坐曰。感君痛悼。我不即朽。可人定人定二字原空闕。據黃本補。後見就。依平生時。當為君生一男。語畢還臥。馥之如言。不取燈燭。暗而就之。復曰。亡人亦無生理。可側作屋見置。須字原空闕。據黃本補。伺滿十月然後殯。爾後覺婦身微煖。

如未亡。即十月後。生一男，男名靈產。出幽明錄[2]

話の中の胡馥之は十余年前に婚姻した妻が子供も出来ないうちに世を去ってしまったのを悲しく思ったので、「あなたはついに忘れ形見さえ残してくれなかったのか」と言った。それに感応して、妻は起きて彼に子供を産んであげることを約束し、毎晩人が寝静まってから、彼女の生前と同じように床を共にするように言って、また寝た。体に微かに温かさを保っていたが、ずっと生でもなく死でもない状態でいた。十ヶ月後に妻は本当に男の子を産み落とした。ここでも、李氏が夫の悲しさと無念さに感応して、魂が暫く体に戻ったのだと思われるが、夫の胡馥之の悲しみについての描写もただ「哭之慟」とあるだけであり、心理描写は全然なされていない。その上、人物の出身や他のことについても省略され、語られていないため、先の「韓重」の話よりも簡略化されており、断片的な怪奇譚の様相を濃くもっている。

次は『述異記』の「周義」という話を見てみよう。

汝南周義。取沛國劉旦孫女為妻。義豫章艾縣令弟。路中得病。未至縣十里。義語。弟必不濟。便留家人在後。先與弟至縣。一宿死。婦至臨尸。義舉手別婦。婦為梳頭。因復拔婦釵。殮訖。婦房宿。義乃上牀。謂婦曰。與卿共事雖淺。然情相重。不幸至此。兄不仁。離隔人室家，終沒不得執別。實為可恨。我向舉手別。又拔卿釵。因欲起。人多氣逼不果。自此每夕來寢息，與平生無異。出述異記[3]

この話の中の周義という人物と妻とは婚姻してからそれほど歳月は経っていないが、お互いに相手のことを深く愛していた。にもかかわらず夫は死ぬ時、別れを告げることが出来なかった。そのことを恨めしく思ったため、死んだ後毎晩現れ、妻と床を共にした。生前と少しも変わらない様子であった。この話は愛し合う若い夫婦が死別した恨みを癒す話であろうか。心理描写は殆ど見られない上、筋

[2] 『太平廣記』巻三百二十一「胡馥之」（古新書局）1977 年 10 月 P.669。
[3] 『太平廣記』巻三百二十二「周義」（古新書局）1977 年 10 月 P.671。

も紹介程度にとどまっているので、やはり怪異譚的な様相が濃い。

次は『廣異記』の「王光本」を見てみよう。

王光本。開元時為洛州別駕。春月。刺史使光本行縣。去數日，其妻李氏暴卒。及還。追以不親醫藥。意是枉死。居恒慟哭，哀感旁鄰。後十餘日。屬諸子盡哭。光本因復慟哭百餘聲。忽見李氏自幃而出。靚粧炫服。有踰平素。光本輟哭。問其死事。李氏云。妾尚未得去，猶在此堂。聞君哀哭慟之甚。某在泉途。倍益凄感。語云。生人過悲。使幽壤不安。信斯言也。自茲以往。不欲主君如是。以累幽冥耳。因付囑家人。度女為尼。放婢為平人。事事有理。留一食許。謂光本曰。人鬼道殊。不宜久住。此益深恨。言訖。入堂中遂滅。男女及他人。但聞李氏言。唯光本見耳。出廣異記[4]

ここでは出現した亡霊、李氏と生前の夫、王光本は床を共にしないが、娘を出家させたり、婢を普通の身分の人として解放したりしたうえに、夫に今後の自分に執心を持たないように諭した後で、また冥界に帰っている。死後も立派に女主人の役を勤めたわけである。これは、中途半端で、死別した夫婦の思い残しを完全に消すわけではないが、ある程度けじめをつけることができて、それなりの効果があるだろう。李氏の「生人過悲、使幽冥不安」という言葉からも分かるように、当時の人々は生きている人があまりに悲しむと、亡霊を不安にさせると考えていた。李氏の亡霊も王光本が悲しみすぎたので出現したのである。しかし、この話の中で作中人物、王光本の悲しみについてはただ「慟哭」という言葉が二回ほど使われている程度でその悲嘆にくれる様子についてはほとんど筆を費やしていないし、内容も簡略化されており、怪奇的なことを記録する性格を濃く残している。

以上、とりあげた四つの例はともに死別した夫婦の願いを叶えたりする、いわば円満型の話である。しかし、亡霊が祟り、生前の配偶者に危害を加える例もある。『甄異錄』の「司馬義」はその例であ

[4] 『太平廣記』巻三百三十「王光本」（古新書局）1977 年 10 月 P.687。

る。

> 金吾司馬義妾碧玉。善絃歌。義以太元中病篤。謂碧玉曰。吾死。汝不得別嫁。當殺汝。曰。謹奉命。葬後。其鄰家欲娶之。碧玉當去。見義乘馬入門。引弓射之。正中其喉。喉便痛亟。姿態失常。奄忽便絕。十餘日乃甦。不能語。四肢如被撾損。周歲始能言。猶不分明。碧玉色甚不美。本以聲見取。既被患。遂不得嫁。出甄異錄[5]

司馬義の亡霊は生前愛していた碧玉が彼との約束を破って、隣人のところへ嫁ぎに行こうとしたときに出現し、矢で碧玉の唯一の長所である美声をだす喉を傷付けた。碧玉は美声を失い、どこへも嫁ぎに行けなくなった。いわば破滅型の話である。ここでの碧玉は決して前のいくつかの例と同じように生者が悲しみすぎたため、亡霊を出現させたのではない。むしろ司馬義の霊に出現して欲しくない筈である。司馬義は自分の碧玉への執念で、悪霊になり、一方的に出現したのである。しかし、話の中でも特に心理描写などを通して司馬義の碧玉への執心ぶりが語られていない。筋や人物の紹介についても不十分であり、やはり怪異的なことを記録する性格を強く持っている。

古代中国の亡霊が生前の妻（夫）と再会する話型は凡そ亡霊が生前の妻（夫）と仲睦まじく過ごす円満型と、亡霊が生前の妻（夫）を傷付けたり、殺したりする破滅型が見られる。そして、亡霊が出現したのは、大筋や人物の対話からすると大体双方の、あるいはそのどちらかの一方の執念によるものだと推測される。大体両方の執心か生きている人の方の執心によって出現した亡霊が生前の妻(夫)と仲睦まじくやっていくが、亡霊の方だけの執心、特に生前の妻(夫)が出現してほしくない場合では、悪霊になる可能性が高い。それ故、登場人物と亡霊の執心ぶりについてさらに筆を費やしてもよかったはずだが、説話の中でそのことについては少し触れる程度にすぎず、あまり詳しく語られていない上、当事者の心理描写も殆ど書かれて

[5] 『太平廣記』巻三百二十一「司馬義」（古新書局）1977 年 10 月 P.669。

いない。その上、人物の紹介や事件についての説明なども不十分なので、断片的な怪奇的なことを記録する様相を濃く持っている。

三、『今昔物語集』における亡霊と生前の妻（夫）と再会する説話

しかし、中国のこれらの亡霊説話はまた日中両国が頻繁に交流していたもとで、単行本として、あるいは類書を通して日本に伝わった。『今昔物語集』震旦部の多くの亡霊説話の中にも、こういう類型の説話を受容した例が見られる。巻十「霍大将軍値死妻被打死語第十八」[6]はその例である。この説話は大体三部分に分けられる。一、霍大将が王女であった妻に先立たれた後、大変悲しんで、毎夕供物をもって弔いに行った。亡妻が将軍の執念に感応して、ある晩将軍の前に出現した。二、亡妻の霊は将軍を抱擁しようとしたが、将軍は恐怖心に駆られて逃れようとする。そのため、亡妻の霊に腰を打たれた。将軍は家に逃げ帰り、夜半に腰痛で死んでしまった。三、皇帝はこのことを聞いて、この霊を尊び、封戸を与えた。その後、国に禍事が起こらんとする時には、栢霊殿のうちで雷鳴が轟くようになった。

この話の一の部分の、亡霊が生前の妻（夫）の執心に感応して、出現したという設定は、従来の中国の亡霊と生前の配偶者とが再会する話型の影響を受けたものと思われる。しかし、二の部分に入ると、中国のそういう類型の話の展開とはすっかり異なってしまう。恋しかった亡妻の霊がせっかく現れたのにもかかわらず、将軍は喜ぶどころか、むしろ恐くなって、逃れようとする。ここでは人間は亡霊が恐いので、亡霊を見ると本能的に逃れようとするという本性をいかして、将軍が妻の亡霊を恐がる様子を滑稽な語り口で語り上げ、従来のこういう類型の話をパロディー化してしまっていると思われる。最後の三の部分の、夫をとり殺した猛霊を国の守護神へと

[6] 小峯和明校注『今昔物語集二』（『新日本古典文学大系 34』岩波書店）1999 年 3 月 19 日 P.331。

祀り上げるという発想には日本の御霊信仰の影が見られる。[7]このような変容が加えられることによって、この説話はすっかり中国の同類亡霊説話と異なり、日本的な色彩を帯びるようになった。

目を転じて、本朝部巻二十七の二つの説話を見てみよう。二十六話の「女見死夫来語第二十六」の梗概は次のようである。

河内の男が大和の女と結婚して幸せに暮らしていたが、三年ほどして夫の方が病気で他界した。死後三年目の秋、夫の亡霊が妻のもとを訪れたが､妻が心に恐怖を宿したのを察して立ち去ったという。

生前はどんなに愛し合っていた夫婦でも、一旦死別して、一方が亡霊になってしまったからには、亡夫（妻）が出現すると人間でいる妻（夫）の方が恐怖を覚えるのである。これも同類の中国の亡霊説話と趣を異にし、震旦部の霍大将軍の説話と同じく、人間が亡霊を見ると本能的に恐怖を覚えるという本性を取り入れたと思われる。但し、この話の中の亡霊は霍大将軍の話の中の亡霊と同じように、恐がる人間を打って死に至らしめることをするのとは違って、むしろ自分の出現の原因について、相手に説明してからそのまま立ち去っているのである。そこに、この話をより平穏で読者が納得しやすいように語ろうとする作者の意図が窺える。

また、この説話は霍大将軍の説話を含む同類の亡霊説話よりも筋が詳しく語られている。まず登場人物についての紹介であるが、主人公二人の出身地､家庭状況､男主人公の仕事が描かれている上に、さらに二人の容貌、才藝についても詳しく描かれている。女の方については「形美麗ニシテ、心労多カリ」[8]とあり、男の方については「年若クシテ形美ナリ（中略）笛ヲゾ吉ク吹ケル」[9]とある。二人を理想的な男性像と女性像として描き上げようとする意図が窺える。そして、何よりも見逃せないのは、死別してからの二人の相手への

---

7 三田明弘『日中説話文学の比較研究』(文史哲出版社)中華民国 93 年 6 月 P.23。
8 馬淵和夫等校注・訳『今昔物語集四』(1976 年 3 月初版 1987 年 8 月第一五版) P.95。
9 馬淵和夫等校注・訳『今昔物語集四』(1976 年 3 月初版 1987 年 8 月第一五版) P.95。

切なる思いである。夫にも先立たれた後の妻の心理については「女此レヲ嘆キ悲シムデ恋ヒ迷ケル程ニ」[10]と語られている上に、さらに「其ノ国ノ人数消息ヲ遣テ仮借シケレドモ、聞キモ不レズシテ、尚死タル夫ヲノミ恋ヒ泣」[11]と妻の亡夫への執心が強調して語られている。また、亡夫の妻への恋しさもなみなみならぬものである。亡夫が妻の前に出現したときは「打泣」いて、妻に「シデノ山コエヌル人ノワビシキハコヒシキ人ニアハヌナリケリ」[12]と妻への激しい恋しさを詠む。さらに、その姿については「紐ヲゾ解テ有ケル。」また「身ヨリ火雲ノ立」っていると描かれている。彼の妻への強い執念はその姿と言動を通して、余すところなく語り出されている。即ち、亡夫が妻の前に出現したのは、両方の強い執念によるものだと強調されているのである。

そして、登場人物の相手への執心についての強調は同じ巻二十七の二十五話「人妻死後会旧夫語」においても見られる。二十五話の梗概は次のようである。

京都のある侍は貧しいゆえに、国守の従者となって任国に下ることになった。遠国へ下向するために旧妻を捨てて、他の裕福な家の女を妻にした。国にいる間も何かにつけて豊かに暮らしていたが、旧妻のことがむしょうに恋しくなった。やげて国守の任期が終り、国守が上京する供をして京に上った。京に着くや否や、侍はすぐ旧妻の廃屋を訪れて、懐抱の一夜を明かしたが、翌朝白日下で見ると、旧妻はミイラ化した死体であったという。

この説話は亡霊が生前の夫と再会する話型の他に生人が幽鬼となった白骨の美人と一夜をともにした話型をも取り入れた説話だと思われる。後世の「雨月物語」にも影響を与えたと指摘された話であ

[10] 馬淵和夫等校注・訳『今昔物語集四』(1976 年 3 月初版 1987 年 8 月第一五版) P.95。
[11] 馬淵和夫等校注・訳『今昔物語集四』(1976 年 3 月初版 1987 年 8 月第一五版) P.95。
[12] 馬淵和夫等校注・訳『今昔物語集四』(1976 年 3 月初版 1987 年 8 月第一五版) P.96。

る。[13]そして、この話も先の二十六話と同じく、登場人物の互いに相手への切なる思いが強調して語られている。まず夫のほうを見てみよう。夫は遠国へ下向するとき、旧妻を捨てて他の裕福な家の女を妻にして、新妻と国で豊かな生活を送っているにもかかわらず、むしょうに旧妻のことを恋しく思ったのである。

> 此ノ京ニ棄テ下リニシ本ノ妻ノ破無ク恋ク成テ、俄ニ見マ欲ク思エケレバ、「疾ク上テ彼レヲ見バヤ。何ニシテカ有ラム」ト肝身ヲ剝グ如ク也ケレバ、（後略）[14]

と話の中で夫の妻への執心が語られている。また、妻の夫への一筋さも語られている。まず、旧妻の廃屋を訪れる夫の目を通した景象である。

> 家ノ門ノ開キタレバ、這入テ見レバ、有リシ様ニモ無ク、家モ奇異ク荒テ、人住タル気色モ無シ。此レヲ見ルニ、弥ヨ物哀レニテ心細キ事無限シ。[15]

その家はすっかり荒れ果てた。肌寒い秋の月下ではしみじみとその哀れさを感じさせる。作者は景物を借りて妻の境遇と内心の苦しさを語りだしている。妻は他の男と再婚しないで、ずっと貧困を耐えて夫の帰りを待っていたのである。妻の夫への愛執は強調して語られている。また、景物に託して人物の境遇、心境を表している点には、この説話の文芸性への志向も窺える。

最後に、作者はさらに第三者の隣人を通して、妻の悲惨な最期を語り出した。

> 「其ノ人ハ年来ノ男ノ去テ遠国ニ下リニシカバ、其レヲ思ヒ入テ嘆キシ程ニ、病付テ有シヲ、繚フ人モ無クテ、此ノ夏失ニシヲ、取テ棄ツル人モ無ケレバ、未ダ然テ有ルヲ、恐テ寄ル人モ

[13] 馬淵和夫等校注・訳『今昔物語集四』（1976年3月初版 1987年8月第一五版）P.90。
[14] 馬淵和夫等校注・訳『今昔物語集四』（1976年3月初版 1987年8月第一五版）P.91。
[15] 馬淵和夫等校注・訳『今昔物語集四』（1976年3月初版 1987年8月第一五版）P.92。

無クテ、家ハ徒ニテ侍ル也」[16]

妻はずっと夫の帰りを待っていたが、最後は苦しさに耐えかねて、ついに病気になって世を去ったわけである。しかし、かならずや夫と枕を交したいという､その執念が彼女の魂魄をそこに留まらせて、夫の帰ってくるまで待っていたのである。読者はその哀れな姿に同情の涙を誘われると同時に、あらためて人間の愛執の威力にも驚かされるであろう。

『今昔物語集』の本朝部にあるこの二つの亡霊と生前の妻（夫）と再会する説話は、既に単なる怪奇な亡霊譚を記録するものではなくなり、人間の愛執を語ろうとする文芸性を有するものへと変容したのである。

四、結び

以上､『今昔物語集』巻二十七の二十五話と二十六話を中心に『今昔物語集』と中国の古代小説との関連及び異同を考察して来たが、問題はまだ多く残されている。しかし、およそ次のようなことが言えよう。

震旦部巻十の十八話は亡霊と生前の夫（妻）と再会する類型の話を受容した際、すでに人間が本能的に亡霊を恐怖するという本性をいかして、従来の話型を書きかえ、パロディー化した上に、日本の御霊信仰を付け加え、新型の話として作り上げた。王朝部の二十五話と二十六話に至って、依然として人間が亡霊を恐怖する本性もいかしているが、その上、筋や人物描写について、さらに詳しく語られるようになった。また、景物描写を通して登場人物の心理と境遇を語りだす文芸的な描写方法も使われている。そして、何よりも注目すべきなのは、もともと中国のそのような話型の中にも存在していたが、そこでは触れられる程度に過ぎず、あまり詳細に語られていなかった人間の執念がここで増幅・強調して語られていることで

[16] 馬淵和夫等校注・訳『今昔物語集四』（1976 年 3 月初版 1987 年 8 月第一五版）P.93。

ある。亡霊が妻（夫）と再会したのは、すべて二人の愛執によるものだと語られている。

こうして、様々に工夫を凝らしたことによって、この二つの話は既に単なる亡霊と生前の妻（夫）との再会を記録する怪異譚ではなくなり、生と死を越えるべき人間の執念を語る文芸性を有する作品になったと言えよう。